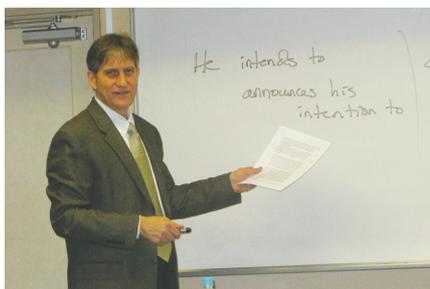




軸の時代Ⅰ／軸の時代Ⅱ－いかに未来を構想しうるか？ P4



若手研究者による国際医療倫理ワークショップ P8,9



平成20年度アカデミック・ライティング集中講座 P13

■巻頭エッセイ

唐沢かおり 本田 洋

■イベント報告

公開シンポジウム

「軸の時代Ⅰ／軸の時代Ⅱ

－いかに未来を構想しうるか？」

アフマド・ザード教授講演会

若手研究者による国際医療倫理ワークショップ

他

■若手研究者の活動

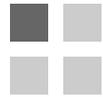
平成20年度アカデミック・ライティング集中講座

他

■企画案内

死生学ワークショップ

「戦争と戦没者をめぐる死生学」予告



形を残す

唐沢 かおり (人文社会系研究科准教授 社会心理学)

私の母は、ある理由でお墓にはいることを嫌がっていた。「お墓に自分の骨を入れずに、散骨するのが遺言」と常日頃から私に念を押していたし、「面倒なら適当に山の中にも埋めなさい」などと、ずいぶん乱暴なことも言っていた。母の死後、さすがに、そのまま骨を山の中に埋めるわけにもいかず、さりとて、遺言を無視するわけにもいかず、散骨代行業者をネットで探したりなどした。しかし、探しながらも散骨することに対して、釈然としない思いがずっと心の中にあった。それは母の「形」が消えてしまうことへの抵抗だった。散骨で海や土に返ると考えれば、骨はこの地上に存在するのだから、本当に消えてしまうわけではないと思えるのだけれど、細かい粉となり散ってしまえば、自分が知覚できる実体としての形がなくなる。そのことが嫌だったのだ。そして、あれこれ手段を探した末、遺骨をセラミックに混ぜてプレートに成型するというやり方を選択した。

なぜ、私は形を残したかったのだろうか。

死ぬことは怖い。なんと言っても、自分がなくなってしまうのだ。今こうやって、考えながらキーボード上で指を動かす私の身体、思考、感情が全部消え去るのだ。もちろん怖さだって死ねばなくなるのだから、死ぬ前から死の恐怖について考えるなんて無意味だと開き直ることも可能だ。死ねば「すべてはおしまい」だから、何を怖がることがあるのか……。しかし、そう言ってみても、死に何かのきっかけで直面したとき、やはりそれは「怖いもの」として立ち現われる。その怖さは、「生き延びる」ことを志向してデザインされた人の心が自然と生み出すものかもしれない。死ねばおしまいだからどうでもいいのさ、なんていう態度は、進化の歴史のなかで生存競争に打ち勝ってきた遺伝子に逆らうようなことなのだろう。

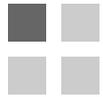
その一方で、死に対する恐怖が不可避だとしても、それに対処する仕組みもまた、私たちの心、そして心の営みの結果として構築されてきた社会や文化の中に埋め込まれている。そのひとつが、死後も他者との関係の中で、自分がこの世界に残り得るというストーリーを信じるこ

とだ。たとえば、他者の心の中に残るとか、仏となつてこの世に残った他者を見守るとか、そういうこと。こういう考え方による対処の仕方は、他者との関係性の中で生きている「ヒト」という種の特権かとも思う。他者の存在が必須であることなんて、いまさら大声で主張することでもないのだけれども、そのことは死後の世界にまで続くのだ。

そして、このようなストーリーは、私たちが「後に残された者」として自らの死までの時間を過ごさざるを得ないからこそ、いっそう重要だ。親しい人の死により、身体を媒介としたその人との関係の持ち方は断たれてしまう。でも、その後、自分の心を経路とした関係がまだ続くと信じ、その関係の継続を主観的経験として実現することで、死の悲しみに対処できることはもちろん、死後も残るというストーリーが、リアルなものとなるのだから。

とはいえ、私たちは、目の前に存在する形ある実体に反応して生活しており、それを持たない対象を心の中に生かし続けるのは難しい。人の心は「忘れる」ことに長けている。時間が経つにつれ記憶が薄れていく残酷さは、人生経験を重ねる中でよく理解しており、他者の心の中に残るなどということは、ひどく、不確かなことにも思える。だから、実体をもった形、たとえば、形見の品、写真、お位牌、お墓などを生活の中におき、心のなかに生かす手がかりにする。それらの中には、宗教的意義の点から語るべきものもあるのだろうけれど、心に対する機能という点では、記憶の中に死者をよみがえらせる大切な手がかりであり、死者が心に生きるためのメディアだ。

さて、問いの答えである。私が形を残したかったのは、忘却に抵抗し「心の中に生かしつづける」ことを自分の体験として実現するためか。遺骨という身体に由来するものは、とりわけその効果が高そうだ。しかし、普通は「母に対する愛着ゆえに」などと答えるものであり、死後も他者の心に残るというストーリーを信じるためなどというのは、素直じゃないのかな。だとしても、私をそういう娘として認めていた母は、「まあええわ」と笑いながら言いそうだけれど。



死と生のかかわり——民族誌と自己体験のあいだ

本田 洋 (人文社会系研究科准教授 社会人類学／韓国朝鮮文化研究)

ある個人の死が家族・知人や共同体にどのような影響を及ぼし、またそれによってもたらされた非日常的な状況がいかにかたまりられるのかという問題は、通過儀礼やライフサイクル(あるいはエイジング)を取り上げた古典的な民族誌の射程内に留まらず、今日の人類学にとっても、重要なテーマとなりうるのだと思う。

韓国の地方社会でフィールドワークを行うようになって20年余り経ったが、その間フィールドの人たちの死の場面に幾度となく遭遇し、他方で私自身も、身近な死に翻弄される経験を何度かした。死にゆく人たちだけではなく、その死によって直接、間接の影響を受ける人たちもそれぞれの死の当事者であるということ、わが身をもって知ったことになる。

死に翻弄された体験としては、10年前の父の死が最たるものであった。あのときのことを語ろうとすると、強く重い思念が頭を内から圧迫して、いまだにうまく言葉にできない。その経緯をなるべく客観的に記すと、まず発端は、父が帰宅途中に、呼吸器官の突発的な発作に襲われたことであった。すぐに救急車が呼ばれて病院に運ばれたが、呼吸困難による心肺停止状態が半時間ほど続いたため、心拍が回復したときにはすでに、大脳の機能の大半が不可逆的に失われてしまっていた。担当医の診断によれば、意識が回復する可能性は全くなかった。

それでも人工呼吸器で呼吸機能をかろうじて維持し、残された身体機能の維持に最小限必要な栄養のみを供給する形での消極的な「延命」治療を施され、結果的に意識を不可逆的に失ってから1年余り「生き続けた」。父はもともと医学研究者で、老年で病気がちになってからも、倒れるまでは非常勤で患者を診ていた。常日頃から延命治療に対しては否定的な物言いをしており、本人にとってはさぞかし不本意な状態であったかと思う。

「生き続けた」と書いてはみたが、これを生きている状態と呼べるのかと、このことを思い出すたびに考え込んでしまう。担当医からすれば、医学的に死亡と判断されるまでは生きた患者であり、本人自身、あるいは家族による明確な延命拒否の姿勢が示されない限り、人工呼吸器を止めたり栄養供給をやめたりすることは

できない。他方で家族の側も、意識が回復する見込みが全くないといわれても、救急治療の結果として心臓が再び動くようになり、呼吸をして脳以外の身体が機能している姿を見ていると、人工呼吸器のスイッチを止めればすぐに死ぬといわれたところでそう簡単に延命治療の停止に踏み切れるものではない。

途中から私は回復につながらない治療はやめてもらおう、つまり意味のない延命はやめたほうが良いと考えるようになったのだが、他の家族、特に母には心理的、あるいは道義的な抵抗感があって、最後まで家族の意思を統一することができなかった。しかも私は当時国費による在外研究期間中で、最初に倒れたときに一時帰国することはできたが、その後は臨終になったらすぐに帰国できる準備をして、在外先で過ごすしかなかった。異国から異議を唱えても、真意は伝わりにくかった。延命治療を中止すべきであるという自分の考えが適当であったのか、あるいはこのような終わり方がよかったのか、今でも判断に迷う。また、あのときは家族の皆が葛藤を抱えつつも、それが結局何であったのかわからないままに、終わりを迎えてしまったように思う。

これは特殊な体験なのかもしれないが、自己の個別的な体験と(研究者として分析の対象とする)民族誌的知識を同じ地平で理解しようとするのであれば、何をもって生の終わり、あるいは死と捉えるのかについて、社会や家族どころか個人においても不確定な状況が生じうることになるだろうか。それ以上に切実なこととして、実際に身近な死に直面しつつある状況では、時にはこの不確定性に折り合いをつけぬままに状況に向きあわなければならない。死に際しては、死者との関係や死者を取り巻く者たちの関係が、凝縮された形で表出する。死への向きあい方、あるいはやり過ごし方は、そのような関係性の交錯するなかで、必ずしも慣習では処理しきれぬ形で、個別的に模索されるものなのであろう。

公開シンポジウム「軸の時代Ⅰ／軸の時代Ⅱ」

竹内 整一（人文社会系研究科教授 倫理学）

2008年11月13日（木）、「応用倫理教育プログラム」との共催の公開シンポジウム「軸の時代Ⅰ／軸の時代Ⅱ——いかに未来を構想しうるか？」が、法文2号館・文学部1番大教室で開催された。これは、本来「多分野交流演習」として予定されていたものを公開シンポジウムとしたもので、基調報告を見田宗介氏が、コメントを、加藤典洋、田口ランディ、竹田青嗣、島菌進、の各氏が、また司会は竹内が務めた。

基調報告で見田氏は、

① 一定の環境条件下での一定の生物種の個体数は、基本的にロジスティック曲線というS字曲線を描くが、地球環境下の人間種もこの限定を免れない。S字の後のカーブをこえてどう安定平衡状態にもたらしうるか、に人間種の未来がかかっている。

② 世界のエネルギー消費の変化は、ここ100年でほぼ直角に近い曲線を描いて加速しているが、このままでは資源・環境的に限界に接近しており、どこかで減速に転じないかぎり、人間種の未来はない。

③ 人間の精神史に「軸の時代」という、ギリシア哲学、仏教、儒教、キリスト教など、現代にいたる精神の基軸の創出された時代があった（「軸の時代Ⅰ」）が、今やわれわれは上記のような要請に応えうる、新たな「軸の時代Ⅱ」の思想を構想しなければならない。その課題は、世界の「有限性」を引き受ける思考の枠組みと、社会のシステムを構築することである。

④ 人間主義は人間主義を超える思想によってしか支えられない。

⑤ 以上の思想課題は、すでに1970年代以降、変化しつつある人々の意識の変容を正確に捉え、そのさきを設定されるべきものである。

およそ以上のような見田氏の基調報告を受けて、まず加藤氏が、こうした鳥瞰的な問いの必要条件として真に内在的な課題設定がなされるべきこと、またそこからの視点の移行が「継起的でなく重層的」であるべきこと、などを提言し、続いて田口氏が、人間主義を超える思想課題として、花と昆虫など異種生物間に作用するカイロモンの存在としての人間の再定義のあり

方如何を問うた。また竹田氏は、「現代」的課題は、人間的自由を解放する社会システムの創出という「近代」の根本的理念の真の完成にあるとして、自由経済システムとしての資本主義そのもののうちへ乗りこえの鍵を見出すべきだ、と主張した。最後に島菌氏は、欧米のポスト枢軸文明を志向するパラダイムシフト論の流れをユートピア主義の系譜に見て、日本における新霊性文化の先駆でもある見田氏の所説もその流れを棹さずものとして、その論点・視点のあり方を糾した。

予定された時間をはるかにオーバーしながら、実質的な討論をする時間はほとんどとれなかったにもかかわらず、それぞれの提題、提言の出力の高さに会場全体がある緊張感をもって、4時間をこえる時間があつという間に過ぎた。同時中継の2番大教室会場も含めて440名の参加者があつたが、15名のスタッフの準備周到の連携プレーによって、きわめてスムーズにとり行われた。

（なお、本シンポジウムの記録は、シンポジウム論集『軸の時代Ⅰ／軸の時代Ⅱ』として、本年度夏休み明けには刊行いたします。）





アフマド・ザイド教授講演会

去る2008年11月25日と同28日に、カイロ大学文学部長であるアフマド・ザイド教授(社会学)を迎えて、講演会を催した。各々東大法文2号館の教員談話室と一番大教室を会場とした。

ザイド教授はエジプトを代表する社会学者であり、その射程はムスリム社会における“宗教的”言説の分析や、エジプトにおけるグローバリゼーションの影響から、今回お話しいただいた「死生」をめぐる慣行まで、実に広角である。今回の招聘は、2009年9月30日と10月3日にカイロとアレクサンドリアで予定されている死生学のエジプト会議を見据えてのものであった。招聘、及び講演会はNIHUプログラム「イスラム地域研究」と合同で行っている。

初回の講演には、島蘭進リーダーや片倉もとこ氏(国際日本文化研究センター前所長)から、第2回目にはやはり立花政夫・人文社会研究科長から冒頭の御挨拶があった。後者については、カイロ大学と東大の間の学術協定を担当する、双方の文学部長という意味合いも込められていた。

多忙なスケジュールの合間をぬって、中国出張の帰りに寄り道いただいたのだが、資金力においてこそ中国に大きく劣ったものの、交流への熱意と学問への情熱、学生のチームワークなどによって、ザイド先生の印象は頗る良いものとなった。以下は、参加した大学院生(修士課程・芹川梓)による報告である。

第1回「現代エジプトにおける死の儀礼—その社会的・文化的側面—(Death Rituals in Modern Egypt: Social and Cultural Aspects)」

この講演では、現代エジプトにおける死の儀礼をテーマに、その社会的・文化的側面について話していただいた。死は神によって定められた運命とされ、ある種の夢や、普段と違う出来事などは死の予兆と信じられている。

人が死ぬと、直ちに通りやモスクにおいて公表される。遺体は、湯灌後手早く布に包まれ、ムスリムならモスク、コプト・キリスト教徒であれば教会へ移動し、特別な祈りが捧げられたのち、埋葬地へと運ばれる。埋葬後一から三夜にわたって、モスクや教会で葬儀が行われる。葬儀への列席者数やその顔ぶれは、故人の社会的な地位や、その家族の影響力を物語るものである。哀悼の表現のしかたは、故人の性別、年齢、社会的地位によって規定される。遺族は、泣く、服を引き裂く、顔を叩くなどして悲しみを表す。また、色のつ

大稔 哲也(人文社会系研究科准教授 東洋史学)
芹川 梓(人文社会系研究科修士課程 東洋史学)

いた服を身につけること、料理すること、菓子を食べること、祝祭を祝うことなどは慎まれる。

このように、死を取り巻く儀礼は、伝統や宗教などの文化的背景を反映しており、象徴性に富んでいる。そして、集団内での特定の地位を再確認したり、集団の社会的結束を高めるといった社会的な機能も果たしているのである。

第2回：「現代における生と死の統合：二つの事例研究から(Integration of life and Death In Modern Times : Two Case Studies)」

エジプト文化において中心的なテーマをなしてきた死は、人々の生とどのようなかかわりを持っていたのか。二都市の場合を例に、解説していただいた。

第一の例は、上エジプトの村バフナサーだ。大征服時代のムスリム殉教者たちが埋葬されたと伝えられるこの村は、聖地とみなされ、周辺地域のための墓地となった。そして、周辺地域から人々が訪れる公共の場所としての機能も果たすようになった。様々な困難解決に参詣に訪れる人もいれば、行楽のため、あるいは子供のおもちゃや菓子を買う目的で来る人もいた。祝祭日や金曜日には聖者廟の周囲で祭りが開かれた。ここでは死者たちはご利益を与え、弱きものを助ける存在とみなされた。

第二の例は、カイロ郊外のカラーファ地区だ。ここもまた古くからの墓地区であるが、バフナサーとは違い、現在に至るまで多くの人々が住み続けてきた。昔から宗教的活動、特にスーフィーの活動が盛んであり、王朝によって数々の宗教施設が建設され、重要な参詣地でもあり、救貧活動や祝祭が行われるなど、経済的および政治的活動の場としての役割も果たしてきた。

墓地は、不正や束縛に満ちた現実から解放してくれる場所であった。死は生と切り離されていたわけではない。むしろ、死者たちの眠る墓地において、人々は豊かに生を営んできたのである。



第3回BESETO 哲学会議（東京大学駒場キャンパス）

一ノ瀬 正樹（人文社会系研究科教授 哲学）

去る2009年1月10日と11日の二日間に渡って、東京大学駒場キャンパスにおいて「第3回BESETO哲学会議」(The Third BESETO Conference of Philosophy)が開催され、大きな成功を収めた。BE・SE・TOとは、いくつかの機会に何度か触れたことだが、「Beijing」(北京)、「Seoul」(ソウル)、「Tokyo」(東京)それぞれの頭二つの文字を取って並べたもので、本学においては、北京大学、ソウル国立大学、東京大学の三大学の共同学術活動のことを指す言葉として用いられている。「BESETO哲学会議」は、その名の通り、三大学の哲学・思想系の教員や学生を主とする学術交流活動であり、2007年以来、すでに第一回をソウル大学にて、第二回を北京大学にて開催した。これらを承け今回、駒場グローバルCOEと、本郷のグローバルCOE死生学との共同開催プロジェクトとして、第3回が東京大学駒場キャンパスで開催された。今回の会議をオーガナイズされた駒場の村田純一教授、そして駒場COEリーダーの小林康夫教授に深い感謝の意を表明したい。「哲学会議」といっても、ここでの「哲学」は非常に広い意味で解されており、東洋思想、歴史、文学、宗教などの研究も包含しており、死生学COEとの適合性も高い。実際、今回の副題は「知識・行為・生死をめぐる哲学の東アジア的文脈」(Philosophy in East Asian Context: Knowledge, Action, Death, and Life)と銘打たれた。

このBESETO哲学会議は、使用言語を「英語」に限定する、というポリシーを採用しており、今日のグローバル化を受けて、東アジアからの発信ということを見据えている。英語での発表や質疑を積み重ね、三大学での共通体験としてゆくことの意義は計り知れないほど大きい。今回は、ソウル、北京両大学からそれぞれ十数名の参加者、東京大学の駒場・本郷の両キャンパスから計20名を越える参加者を得た。死生学COEからは、教員スピーカーとして清水哲郎教授、鈴木泉准教授、若手スピーカーとして竹村初美氏、堀田和義氏、鈴木聡氏、大谷弘氏、景山洋平氏、が参加した。発表内容は実に多岐にわたった。竹村氏はハワイ文化についての研究発表を行ったし、堀田氏はジャイナ教について論じた。また、鈴木氏は選好論理を利用した意思決定理論について、大谷氏はウィトゲ



ンシュタインの意味の使用説について、そして景山氏はハイデガーの存在論とトポロジーについて発表した。教員スピーカーの鈴木准教授は、ドゥルーズ哲学に沿いながら「非ヒューマニズム」の哲学の射程について展開し、多くの質問を誘発した。清水教授は、能力に基づく持続可能な福祉と複数世代間にわたる関係性の倫理という切実なテーマのもと、詳細なデータによる発表を行い、死生学研究の成果を知らしめる機会をもたらした。

その他の発表も、大変に充実していた。正直に言って、ソウル大学と北京大学の若手研究者の能力と可能性に私は身震いを覚えさせた。最後のクロージングセッションの時、ソウル大のHwang教授がBESETOを「東アジアの哲学のオリンピック」と称したが、当たらずも遠からずかもしれない。三大学の切磋琢磨が大きな成果に結びつく強い予感を私は抱いたのである。また、今回はたまたまソウル大学を訪れていた米国デューク大学のOwen Flanagan教授も参加してくれて、国際性も大いに高まったと思う。このように、各大学を一時的に訪れている外国人研究者や留学生もBESETOに積極的に参加してもらうことで、さらに多様な刺激が加わり、会議自体のプレゼンスを高め、世界への発信の一助ともなっていくだろう。次回第4回は再びソウル大学にて2010年1月7日・8日に開催される。死生学プロジェクトからの、多くの方々の参加を続けて期待したい。

《医療・介護従事者のための死生学》基礎コース

—冬季セミナー—

清水 哲郎 (人文社会系研究科上廣死生学講座教授 哲学・臨床死生学)

2009年1月31日(土)に、《医療・介護従事者のための死生学》冬季セミナーを「高齢者のケア」をテーマとして開催した。本セミナーは《医療・介護従事者のための死生学》基礎コースの一環であり、同コースの受講者を対象とするものであるが、今回は受講者以外の方も参加しやすいような会場等の設定にしたため、沖縄、九州、北陸など遠方からの参加を含み、参加登録者は計106名であった。が、当日豪雨により列車の運休などが起き、参加者数は正規受講生47名、聴講生等39名、合計86名であった。

午前中には、本セミナー定例の臨床死生学演習・事例検討を行い、参加者の中から高齢者ケアに携わっておられるお二人の方に報告をしていただき、グループワークおよび全体の共同検討を通して、問題を考えた。事例の一つは、アルツハイマーの病状が進んだ妻を夫が付き添って在宅で介護していたが、誤嚥性肺炎により入退院を繰り返す中で、胃ろうを作るかどうか、また今後どのようにこのご夫妻の生活を支えていったらよいかということが、夫の生き方も絡んで問題となったものであった。このご夫妻にとっての最善は何か、またどうコミュニケーションを進めて行ったらよいか、問題の深さを改めて実感したケースであった。

午後はまず、東京大学ジェロントロジー寄附研究部門の秋山弘子教授に講演をしていただいた。近い将来、人口に占める高齢者の割合が非常に高くなる日本の社会の中で、高齢者がよい生を生きられるように、社会としてどのような対応を考えて行く必要があるか、といった問題の全体像を示していただいた。

次にシンポジウムでは、高齢者医療および介護の現場でいろいろと工夫をしながら、高齢者のよりよい生活をなんとか実現しようとしておられるお二人の方のお話をうかがい、共に考えた。まず佐藤伸彦医師からは、富山県砺波市で、お年寄りの医療を実践することを通して、患者のナラティブを大事にした高齢者医療の新しいあり方を見出し、これを実現しようとしておられる状況をお話いただいた。また、宮島渡氏からは、長野県上田市で、経営する介護施設に入所しておられるお年寄りの視点に立つことによって、グループホームへと進み、また地域全

体の高齢者の介護体制を考えておられる様子をお話いただいた。現実に向き合って、真摯に高齢者のよい生の実現に取り組んでおられるお二人のお考えは、参加者の共感をよんでいたように思う。

最後に本セミナーの締め括りとして、上野千鶴子教授に講演をしていただいた。すでに『おひとりさまの老後』などの著書で知られる同教授は、ケアを受ける側の立場で、ケアの場で当事者主権という考え方がいかに大事であるかを中心に、最近の一連のご発言のエッセンスをまとめて分かり易く提示していただいた。

総じて、今回は、高齢者ケアというテーマに集中する仕方プログラムが組まれており、全体のまとまりがよかったという声が聞かれた。

来年度も、《医療・介護従事者のための死生学》基礎コースを継続して進めて行き、このようなセミナーを3回ほど開催する予定である。なお、その内の一回は、来年度12月に本学にて開催される予定の臨床死生学会第15回大会に日程を合わせて、より充実した内容のセミナーとする予定でいる。

冬季セミナー授業実績

1. 事例検討 (臨床死生学演習)
担当：清水 哲郎 / 山崎 浩司
2. 講演 (死生学トピック)
講師：秋山 弘子
(東京大学 ジェロントロジー寄附研究部門教授)
演題：長寿を心から喜べる社会をめざして
3. シンポジウム 高齢者ケアの現場から
(臨床死生学トピック)
 - ・看取る、ということ
佐藤 伸彦
(市立砺波総合病院 地域医療部副部長・
医師 老年病・臨床倫理)
 - ・認知症グループホームにおけるターミナルケア
— K氏へのグループホームケアを通じて —
宮島 渡
(社会福祉法人 恵仁福祉協会高齢者総合福祉
施設アザレアンさなだ 常務理事・総合施設長)
4. 講演 (死生学トピック)
講師：上野 千鶴子 (東京大学 社会学教授)
演題：ケアされる側の論理：当事者主権の立場から

若手研究者による国際医療倫理ワークショップ

島 蘭 進 (本COE拠点リーダー 人文社会系研究科教授 宗教学宗教史学)

オックスフォード大学セントクロス・カレッジにおいて、2008年12月10日に若手研究者による国際医療倫理ワークショップが開催された。この会議は、グローバルCOE「死生学の展開と組織化」とオックスフォード大学との共同主催で、さらに上廣倫理財団の後援を受けて行われた。このワークショップに続いて、日英米の数多くの研究者が参加する医療倫理に関わる研究会議が開催されたのにあわせて、とくに若手のためのワークショップをこの日に開催したものである。

日本側からは、東京大学グローバルCOE「死生学の展開と組織化」、および東京大学上廣死生学講座のメンバーとして、島蘭進、清水哲郎、一ノ瀬正樹、山崎浩司(以上、教員)、会田薫子、竹内整一、土屋敦が、また、静岡大学文学部より堂園俊彦(准教授)、東京大学医学部より藤田みさを(特任助教)が参加した。

オックスフォード大学からは、トニー・ホープ、ロジャー・クリップ、ロジャー・トリッグ、ジュリアン・サヴァレスキュ、ジャネット・ラドクリフ・リチャーズ、ニック・ポストロームらの教員の他、約20名の若手研究者が参加した。さらに、アメリカ合衆国からは、ハーヴァード大学のダニエル・ブロックとデューク大学のアレン・ブキャナンの2人の教授と1名の若手研究者が参加した。

サヴァレスキュ教授の主旨説明、島蘭による東京大学グローバルCOE「死生学の展開と組織化」

の説明に続いて、東大から3人、オックスフォード大学から4人、アメリカ、ケースウェスタン大学から1人、計8人の研究報告と討議が行われた。

英米の若手研究者の取り上げた問題は、女性の生活設計という理由による卵子の冷凍の是非(イモゲン・グールド)、生物学による生命体創生(synthetic biology)の許容の是非(トーマス・ダグラス)、「人間の尊厳」概念を形式的操作が可能な概念に変容させる可能性(パトリシア・スクリプコ)、親が子どものためにエンハンズメント的な措置をとることの妥当性(ドミニク・ウイルキンソン)、余剰胚の廃棄によって生ずる損失の倫理的意義(トビイ・オールド)などといった問題である。

他方、日本側の若手研究者は、生体間臓器移植の際のドナーの意志決定の実際についての調査研究(藤田みさを)、日本における脳死・臓器移植に



参加者一同

オックスフォード医療倫理会議に参加して

特任研究員 土屋 敦

3日間に及ぶセッション中に、若手研究者から9報告、シニア研究者から14報告(それぞれ報告30分+討論)と極めてタイトなスケジュールの中で、比較的小じまりとした会議室の中に、参加者約40名というあまりにも贅沢かつ濃密でありまた緊張感の漂う雰囲気の中、大変水準の高い議論の時間を共有させて頂いた。オックスフォード上廣プラクティカル・エシックス・センターはエンハンズメント論の一大拠点であり、私の報告主題とも一部重なるため報告時は大変に緊張したが、暖かく受け入れて下さった島蘭進教授、J.サヴァレスキュ教授はじめ皆様に感謝したい。また、現地では同世代の若手研究者の方々と多くの意見交換

の時間が持てたことも大変な収穫であった。おそらくは共同研究など、発展的な展開が今後あるはずである。また、オックスフォード大はじめ英語圏の研究者からの研究報告もさることながら、東京大学からのシニア研究者・若手研究者の方々の報告もそれに勝るとも劣らない大変水準の高いものであったことに、私自身大変勇気付けられた。



ディスカッションにて

おける脳死のダブル・スタンダードの成立経緯とその文化的背景について（会田薫子）、インフォームド・コンセントの理想的な形態のコミュニケーション論的なモデル（竹内聖一）、エンハンスメントに対する日本の公衆の意見についての調査研究（土屋敦）といった問題を取り上げた。

英米の若手研究者の多くは、倫理的妥当性をめぐる理論に焦点をあてたのに対して、日本の若手研究者は具体的な事実経過や資料に即して議論を進めようとする傾向がつかった。しかし、問題意識は似通っており、概して各報告（論文）の質は高く、討議は白熱した。また、プレゼンテーションも高い精度をもちつつ理解しやすいものが多かった。取り上げられている論題は参加者一同が関心をもつことができるものが多かった。後に、英米の参加教員から一様に、報告と討議の質の高さについて賞賛の言葉を聞いたが、日本側の参加教員も同意見だった。

全体として、英米側と日本側の研究者の視点の相違が際だつ結果となった。主要な相違点は、英米の研究者が個人主義や功利主義の前提に立って、個人の利益追求・欲望充足をできるだけ許容しようとするのに対して、日本の研究者が関係やつながりを重視する視点に立って、個人の利益追求・欲望充足を抑制するための価値の源泉について、念入りに考える傾向が強いということによっているだろう。ふだんは医療倫理の討議において、文



報告を聞く若手研究者たち

化的な相違にさほど注意する機会が多くはないと思われる英米の研究者が、文化的価値観や死生観の相違といった次元にまで立ち入って討議をする必要を自覚するところまで討議が進んだのは大きな収穫だった。

日本の若手研究者が英語で研究報告を行い、英語を母語とする若手研究者と英語で討議する場合、どうしても日本側研究者が思うように考えを伝えられない傾向があることは事実である。しかし、若手研究者の英語力も次第に伸びてきており、この度のワークショップではこれまで感じてきた限界を突破していく手応えが得られたように思う。英語による発信力の改善にさらに努めるとともに、何よりも報告内容が充実しており、言語表現力の限界を超えて、訴える内容をもっていることが重要なのは言うまでもないことである。

「認識レンズ」の差異を体感して

特任研究員 会田薫子

国際医療倫理ワークショップでは、「認識レンズ」の差異の体感という得難い経験をさせて頂いた。私は、日本の臨床医が脳死患者を死者として扱うまでに何を目的にどのような医的介入を行っているか、自分の研究知見をもとに報告した。その結末を一言でいうなら、英米人参加者の理解を得ることは難しかった、ということになる。

一般に、人の死は生理学的に決定されると考えられており、医師自身もそう思っているが、実は、日本の臨床医は彼ら自身ほぼ無意識裡に、臨死患者に死亡宣告するまでの期間を操作的に決定することがある。そこにあるのは一義的に、家族が患者の死を受容することを目的とした家族ケアであ

る。私はこれについて脳死を例に話した。脳死は予後絶対不良な状態であるが、脳死診断後、どの時点で死亡宣告するか判断は、文化的なコンテキスト抜きには語れない。また、集中治療技術が進展した現在、脳死を一元的に死とみなすことはすでに科学的でも論理的でもなくなっていることも説明したつもりだったが、英米人参加者は彼らの従来の認識で「脳死は死」と断じ、私を保守派の原理主義者と解した。

死生の在り方や終末期医療に関して日本人と異なった認識を持つ英米人に、日本人の価値観や認識を彼らの言語で理解してもらうということは、非常に難度の高い仕事である。しかし、ここで挫けてはいられない。さらに頑張りかねばと思いを新たにした。

山崎 浩司（人文社会系研究科上廣死生学講師 死生学・医療社会学）

臨床死生学・倫理学研究会では、日常実践における死生に関するテーマを中心に、参加者の自発的な研究発表と、それに基づく自由な討議を行なっている。今年度は本学内外11人の研究者に話題提供をしてもらった。以下、各回の概要を報告する。

●第1回（2008年5月8日）

高校でいかに生と死を語るか——教員に対するインタビュー調査を通じて（山本佳世子：京都大学大学院人間・環境学研究科（①））

高校の「生と死の教育」は十分に普及していないと言われる。しかし山本氏は、関東地方の高校教員22名に半構造化面接を実施し、実際には死生を学生に考えさせる多様な実践がされていること、また、教科書やカリキュラムを標準化するという従来形式の「生と死の教育」を、教員は求めていないことを明らかにした。彼らは、語る内容以上に語り方や語る姿勢を重視し、いつか来る死へ準備するためではなく、学生が現在生きる上で抱えている問いを共に考えることに重点を置いている、という知見が印象的だった。

●第2回（5月29日）

認知症高齢患者の終末期：経皮内視鏡的胃瘻造設術という選択肢の意味——施行要因分析から代替選択肢の提案へ（会田薫子：東京大学グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」（②））

口から栄養を摂れなくなった認知症高齢患者に医師が胃瘻をつける決定は、どのようにされるのか。また、認知症の終末期患者に胃瘻をつけることの倫理性をどう考えるべきか。会田氏は、緻密な質的・量的手法を駆使し、胃瘻による人工栄養補給をしない選択肢を家族に提示するのが難しい、と多くの医師が考えていることを明らかにした。しかし、少数の医師は胃瘻を施行しない選択肢も家族に提示した上で、末梢点滴による看取りを実践していた。これは現時点では現実的と思われる半面、患者にとってこれが最適といえない恐れもあり、倫理的妥当性の検討が必要との認識が示された。

●第3回（6月12日）

死別の悲しみとその彼方（井藤美由紀：①）

死別悲嘆は人をどのような状態に置くのか。その状態に当人や周りの者は、いかに向き合えるのか。

井藤氏は、現代日本における死別によるグリーフとそのケアにまつわる問題を、印象的かつ具体的な遺族の語りを事例に考察した。これら遺族は、幸いにも血縁地縁による社会的支援の獲得が可能だったが、現代ではこうした支援の力が著しく低下している可能性があり、それが昨今の遺族のセルフ・ヘルプ・グループやグリーフ・カウンセリングに対する強い関心の表れに見て取れるのではないかと、井藤氏は示唆している。

●第4回（6月26日）

代理懐胎の問題——身体経験の忘却がひきおこすもの（柳原良江：②）

現代の生殖にまつわる現象は、医療、経済格差、家族、ジェンダー等の問題と絡み合う。柳原氏は、代理懐胎をめぐる状況を詳細に論じた上で、基本的にそれを否とする立場に立ち、その論拠を説得的に示した。根底にあるのは、出産の肩代わりは女性の身体性の忘却を拡大させることにつながりうる懸念である。議論の過程で、なぜ代理懐胎で「母親」を目指す者は、子どもが自分や夫の遺伝子を受け継いでいることに、ここまでこだわる（欲望させられている？）のか、という点を考えさせられた。

●第5回（7月17日）

緩和的鎮静（palliative sedation）——「最終手段」としての医療行為（竹之内裕文：静岡大学農学部）

竹之内氏は、終末期医療では何をもって緩和的鎮静が必要と判断されるのか、ということの問題化した。この意識の背景には、手軽に緩和的鎮静をし過ぎてはいないか、という危機感があり、氏はその倫理性を「痛み」のとらえ方を含めて論理的に考察した。その結果、終末期の実存的な痛みに対し、緩和的鎮静による「人格（実存）の喪失」で対処してしまう、という医療実践のあり方が浮かび上がった。緩和医療の現場で、仮に患者の予後が短く、十分にコミュニケーションがとれないので緩和的鎮静をしてしまう、ということがあるとすれば、その実践は確かに問い直されねばならないだろう。

●第6回（10月2日）

出生前診断を考える——日本の女性運動と障害者運動の“対立”を解きほぐすために（林千章：城西国際大学大学院人文科学研究科）

林氏は、日本の女性運動と障害者運動の対立と連帯の歴史のなかで、両者とも出生前診断に対して反対であり、人が偶然に生まれる権利を認めていることを考察した。そして、この偶然生まれる権利に介入するのが（不確実な）受精卵診断等の技術であり、女性に自由よりも苦悩と迷いをもたらす可能性を提示した。出生前診断では、法レベルで白黒つけるのではなく、日常や現場のレベルで、当事者と医療者とが共に迷いながら歩を進めていくことが重要である、と林氏は示唆している。

●第7回（11月6日）

「遺伝子情報例外主義」パラダイムの揺らぎの中の遺伝医療——臨床遺伝専門医調査から見えるもの（土屋敦：②）

ヒトゲノムの解析が進んでいく中、遺伝情報をどのようなものとみなすのか。土屋氏がとりあげた「遺伝子情報例外主義」では、遺伝情報が「未来の健康を予想できる」、「家族の医療情報を含む」、「歴史的に悪用されてきた」、「社会心理的な危害をもたらす可能性がある」ため、例外的なものであるとする。この考え方に対する賛否があり、遺伝子／DNAをめぐる力の葛藤が、たとえば「予防」や「リスク」といった概念を軸に生じていることが土屋氏によって示された。

●第8回（11月20日）

人工呼吸器の取り外しを巡るさまざまな状況を考える（川口有美子：立命館大学大学院先端総合学術研究科）

ALSで最後に残された眼球運動も止まり、脳波も測定が困難になった時、人工呼吸器をつけないでほしいとの事前診断書を書く患者が欧米では多い。しかし、日本では人工呼吸器の装着率が高い。この状況をどう理解すべきか。そして、患者、家族、医療者は、この問題とどう向き合うのか。川口氏は倫理的側面だけでなく、ALS患者のケア体制の問題も含めて幅広く論じた。日本では、脳波で意思を伝達する装置も開発されているが、その「善用には、個々のあるがままの生を認めあう姿勢と、非言語コミュニケーション能力、それに人間性に根ざした深い洞察力が不可欠である」との主張が示唆的だった。

●第9回（12月18日）

臨床現場と理論をつなぐ研究者——研究者の在り方を考える（有田恵：京都大学こころの未来研究センター）

有田氏は、死に臨む人に協力を仰ぎながら研究する臨床死生学的文脈で、何が研究者にできるのかを問いかけた。対象を客観化せず主体的な語り手とみなし、相手のことばに表れる気持ちや意味を研究者は語り手と共に紡ぎ受け取っていくという、関与・観察的なアプローチの可能性が示唆された。かけがえのない最期の時を過ごす人に対し、「今ここ」で研究者としてできることを還元していくことの重要性を、有田氏は具体的な事例で示した。

●第10回（2009年1月15日）

ある新聞記者の病と死——万朝報時代の堺利彦とその交友（清水哲郎：東京大学大学院人文社会系研究科）

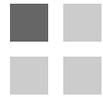
日本人の「死生観」と「望ましい死」——アンケート調査からわかった現代日本人の死生観（中川恵一：東京大学医学部附属病院）

前半は清水氏が、堺利彦（日本社会党の創始者）が万朝報の記者であった時代の交友が記された文献から、明治中期の人間模様と死者の弔い方を、ライフストーリー的にビビッドに浮かび上がらせた。

後半は、東大病院の医師・看護師、がん患者、そして一般市民の3群を対象にした、がん・望ましい死・死生観に関する質問紙調査の結果を中川氏が報告した。氏によれば、医療者とがん患者の間で望ましい死・死生観に違いが見られ、その溝を埋めることの重要性が指摘された。

平成21年度も活発な議論を重ねていく予定である。多くの方の参加を期待している。





土屋 太祐 (本COE研究拠点形成特任研究員 中国禅宗史)

かつて中国に留学していた頃、一時帰国の際に違和感を覚えたものの一つが、日本の時代劇であった。あれは確か、織田信長がその家臣たちと何かを合議する場面であったかと思う。そのやや薄暗い画面をみて、私はひどく「野蛮」な印象を受けた。

当時、私は中国の大学の博士課程に在籍していたのだが、中国語の勉強にかこつけては、テレビばかり見ていた。大してほめられたことではないのだろうが、それでも中国的感覚は身についたようで、とにかく、日本の時代劇に中国のそれとはまるで違った何かを感じたのである。当初、なぜそう感じるのか自分でもよく分からなかったが、しばらくしてその違和感の正体をつかめた。日本の時代劇には知識人がいないのである。これがもし中国の時代劇であれば、為政者の周辺には必ず儒者がいて、「天の道」やら「民の苦しみ」やらを口うるさく説くはずである。彼らは学を修めて「道」を追求し、この「道」によって皇権を監視する。それは中国において無視しがたい政治機能の一つとなっている。ところが、信長の周りにはそれがいないのである。彼の家臣はみな武人であり、口にするのは戦略や謀略ばかりである。それは非常に合理的なのだが、しかし、信長の政策が「倫理道德」に合致するかどうかを監視する儒者がいないことは、私を非常に落ち着かない気持ちにさせた。これがつまり、私が「野蛮」だと感じた理由であり、それは全く中国的(儒教的)な感覚だったのである。

今期のCOEプログラム「死生学の展開と組織化」は、その研究対象地域として東アジアを重視することを掲げている。勢い中国との交流活動は多くなり、私もそのうちのいくつかに参加することができた。どの活動もそれぞれ興味深いものであったが、日本側参加者のなかには、中国の学者と交流することの困難さに素直な驚きを漏らす人もいた。双方の問題意識が異なり、問いと答えがかみ合わないというのである。いったい何がそれほど違っているのか？双方の交流において比較的目についたのは、中国側が、善悪や道德等、抽象的なものを論じたがるのに対して、日本側は善悪の不確定性を強調し、生活のリアルさを追求する、という対比ではなかったかと思う。中国の学者がしきりに「天」や「命」といった概念を云々するのに対し、日本の学者は、これらが中国人の生活においていかほどのリアリティを持っているのかとしきりに首をかしげる。そのような場面が

何度かあったように記憶している。

このようなすれ違いは決して今回の交流に限った偶然の現象ではないだろう。その背後には両国が長い間培ってきた文化的差異、より具体的には、知識人の社会的役割の相違があるように、私には思える。それはつまり、冒頭に述べた、儒者と武人のような違いである。中国において、「道」の政治的機能は決して過去のものではない、とある学者は言う。「道」を代表して政治に参加することは、現代中国の学者にとっても、身体に染みついて離れない習性の一つである。彼らにとって「天」や「命」を論じること是一种の使命なのかもしれない。一方、日本人はそのような思考に「リアリティ」を感じない。日本人にとってそれは、表面的な政治的言説にしか聞こえないのではないだろうか。

日本人にとって、自国と中国との比較は豊富な示唆を持つ。両者は共通の文化的基礎を持っており、それが異なる歴史的経緯を経て現在の差異を形成している。そこには他の国との間にはない比較の基盤が存在しているのであり、我々は中国との比較を通して自国文化の形成過程を見返することができる。ところが、戦後の日本において、中国学は一部の専門家によって担われてきた。このような状況を、「死生学」は変えてくれるのではないかと実はひそかな期待を抱いている。「死生」を問うとは人文学の根本を問い直すことであり、そのような深い問いかけは日中の相違を身近なものとして考えるきっかけとなる。上に見たすれ違いもまたその一つであった。それはすれ違いではあるが、しかし、同時に真の出会いでもある。事実、参加者の多くはそのすれ違いを収穫として受け止めていた。「死生学」という試みによって、東アジアの文化がこれまでとは違った形で我々の視野の中に入ってくることを、せつに願っている。



平成20年度アカデミック・ライティング集中講座

野村 智清 (人文社会系研究科博士課程 哲学)

第13回中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会外国語専門部会の資料によれば、日本語を母語とする人口は約1億2500万人で世界の他の言語の中で第9位となっている。この母語とする人口が日本の人口とほぼ等しいことから明らかなように日本語は日本以外では殆ど使用されていない。一方で、母語とする人口は中国語に次いで第2位の約4億人である英語は、公用語・準公用語とする国の数が54カ国となっている。この54カ国の人口を合わせると約21億人となり、実に世界の人口の約3分の1を占めている。

学術研究を推進する重要な基盤の一つが異なる考えや意見を持つ人々との対話にあるとすれば、この現状に対する判断や憂慮は一旦置くにしても、英語の使用は学術研究を志す者には避けては通れないものとなっていると思われる。このような思いから私は国際学術誌への投稿を目的としたアカデミック・ライティング集中講座への参加を決意した。

グローバルCOE「死生学の構築と展開」の主催で、集中講座は2009年の1月19日から24日の6日間、東京大学の本郷キャンパスにおいて行われた。ウェスタンミシガン大学のCELSISに所属されているトーマス・マークス(Thomas C. Marks)先生が講師を担当された。

マークス先生の集中講座はPeer Reviewという独特の方法を中心に展開された。Peer Reviewは検討対象となる論文の作成者が自分の論文を参加者に1部ずつ配ることから始まる。論文の配布後に、論文作成者は論文を読み上げる。通常1から2段落の読み上げの合間に参加者はコメントや示唆を行う。そしてPeer Reviewの最後にはマークス先生のコメントや示唆の入ったコピーが論文作成者に渡される。論文作成者としてあるいは参加者としてPeer Reviewに加



わることで、この方法には多くの利点があることを実感した。

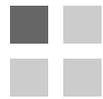
Peer Reviewはマークス先生も参加されていることもあり、当然のことながら英語で行われる。今回の集中講座には哲学、宗教学、言語学、倫理学、イスラム学、インド哲学そして美学などといったさまざまな専門分野での学術研究を行っている方々が参加されていた。使用言語が英語である学会などに参加したとしても、多くの場合に英語を使って話すのは同じ専門分野の研究者であることが多い。それらの場合には、往々にして専門的な術語の共通理解を基盤としてしまう。しかし、Peer Reviewでは自ら作成した論文の内容や意図について他の専門分野に属する方々に英語で説明するという場面に多く恵まれた。このことは、単に自分の考えを整理することができるということだけではなく、英語のコミュニケーション・スキルを伸ばすという意味でPeer Reviewの持つ利点の一つであると思う。

またPeer Reviewで他の方々の論文を聞いて検討することには更なる利点がある。それは集中して他の方々の論文を検討する作業を通して、翻って自らの論文はどうなのか、という疑問を突きつけられることである。マークス先生の他の方々の論文への指摘や自らが指摘しようと考えを巡らすことは、私にとって自分の論文を見つめなおす良い機会になったと思う。

マークス先生はPeer Reviewの前に行われた短時間の講義においても丁寧に論文を明快にする方法やその際に注意すべきことを提示されていた。講義内容は単なる文法事項の確認だけではなく、Chicago-Styleなどの論文の様式や文章の組み立て方を中心としたものだった。そして論文の様式についてもタイトルのつけ方や引用の方法などそして文章の組み立て方についても概念の提示の仕方や段落の作り方など内容は多岐にわたった。

限られた日数ということもあり、多数のそして長大なものも含めてある程度の分量を持った英語の論文と英語を用いて格闘する日々はハードなものだった。しかし、日本の大学で英語圏におけるような論文作成の実地の訓練を受けることは非常に有意義な経験だったと思う。

末尾になりましたが、多くの論文を辛抱強くまた丁寧に検討されたマークス先生と貴重な機会を与えてくださった島蘭先生をはじめとする諸先生方に改めて深く感謝致します。



死生学研究会

第23回 2008年12月19日(金)

山本 栄美子 (人文社会系研究科博士課程 宗教学宗教史学)

本研究会では、「「ピーター・シンガーの〈苦しみ除去プロジェクト〉の解明」と「苦しみ・救済からとらえる生命倫理」について」と題した報告を行った。

ピーター・シンガーは、応用倫理学の分野におけるバイオニ的な存在として、幅広い領域に関心を寄せた自己の見解を積極的に提言してきた人物である。シンガーの実践理論の根底には、関係者すべての利益を比較考量した上で、苦を除去することによって地球上の「苦しみ」の総量を軽減しようという目的意識がある。研究会では、シンガーを中心に、「苦しみ」をどう捉えるかに着目して、20世紀以降の宗教と医療との関係性にも触れ、生命倫理への宗教学からのアプローチに迫る一考察を発表した。

参加された先生・先輩方からは、発表者の立ち位置を明確にすべき、「苦しみ」と「苦痛」の違いとは何か、哲学者の思想の全体像を描こうとするよりも特化したテーマに絞るべきといった指摘や質問が寄せられ、活発な議論が展開された。私自身、改めて死生学に携わる方々の多彩さを実感することもできた。今後の研究を進めるにあたり、貴重な意見を頂戴できたことに感謝したい。



2008年度 若手研究者支援研究費受給者

氏名	研究室	研究テーマ
朝倉友海	哲学	東アジアの生と死をめぐる哲学 ：現代新儒家と京都学派
飯島沙耶子	美術史学	岩佐又兵衛工房作の古浄瑠璃絵巻群における死者の表象について
石瀬博	倫理学	死生観とキリスト教倫理
井ノ口珠喜	医学部	若年乳癌患者をめぐる諸問題の検討
倉本尚徳	中国思想文化学	北朝時代仏像・道教像銘文にみる死生観の研究
黄崇修	中国思想文化学	鬱の研究-朱丹溪学派の言説を中心として-
坂野正則	西洋史学	17-18世紀フランス人宣教師の死生観の形成と「他者」の救済に関する研究
佐々木慎吾	倫理学	哲学的生命観と生物学との影響関係 -近現代日本を中心として
エリック シッケタンツ	宗教学宗教史学	近代中国における戦死者祭祀
渋下賢	言語動態学	死生を語るための言語：死の遍在下におけるケクチ語書き言葉の生成
玉村恭	美学芸術学	能を通してみる日本人の死生観
野村智清	哲学	バークリ哲学における記号と経験しえぬ事柄としての自己の死について
森功次	美学芸術学	1940～50年代におけるサルトルの倫理思想における生・死・芸術
山本栄美子	宗教学宗教史学	生命倫理言説の宗教文化的背景の比較に関する研究
萬屋博喜	哲学	ヒューム因果論の研究と、その臨床場面における総合的措置への適用



死生学ワークショップ

「戦争と戦没者をめぐる死生学」予告

一ノ瀬 正樹 (人文社会系研究科教授 哲学)

グローバルCOE「死生学の展開と組織化」の活動の一環として、戦争そして戦没者の慰霊をめぐる諸問題について、おもに日本と韓国の研究者を招いて、死生学的な観点から問題提起をするワークショップを開催する予定である。死生学にストレートに関わる領域であり、まずは学術的議論の一つの機会を設けたいと考えている。全体を4セッション構成とする。日韓の研究者がともに議論を交えるコラボレーションの場を構築したい。現時点での予定として、おおよそ次のような内容を思い描いている。各セッションのタイトル、および★印の後の各テーマは現段階でのおおよその目安である。

日 時 2009年6月6日(土曜日) 午前10時40分より

場 所 東京大学本郷キャンパス・法文二号館一番大教室

プログラム素案

第1セッション「戦没者への眼差し」(10:40~12:20)

- ★ 「元寇の死者と「怨親平等」
- ★ 「現代の慰霊と追悼の営み」など
スピーカー・テレント・タイトル (北海学園大学)
・池映任 (東京大学)
コメンテータ・日本の研究者 (未定)

第2セッション「戦争と死の物語り」(13:30~14:50)

- ★ 「20世紀の戦争の悲劇」など
スピーカー・加藤陽子 (東京大学)
コメンテータ・朴 榮 濬 Young-June Park (Korean National Defense University)

第3セッション「民衆にとっての戦争」(15:10~16:30)

- ★ 「朝鮮半島戦時下における民衆」など
スピーカー・朴 均 眺 Gyun Yeol Park (Gyeongsang National University)
コメンテータ・六反田豊 (東京大学)

第4セッション「戦争の倫理」(16:50~18:30)

- ★ 「戦争責任とは何かー「正しい戦争」をめぐるー」など
スピーカー・朴 政 淳 Jung Soon Park (Yonsei University)
・小林正弥 (千葉大学)
コメンテータ・一ノ瀬正樹 (東京大学)

時間配分は、スピーカーの提題25分、コメンテータのコメント10分、を予定している。

目 次

— CONTENTS —

●巻頭エッセイ●

形を残す

唐沢かおり 2

死と生のかかわり——民族誌と自己体験のあいだ

本田 洋 3

●イベント報告●

公開シンポジウム「軸の時代I／軸の時代II」

竹内 整一 4

アフマド・ザード教授講演会

大稔 哲也／芹川 梓 5

第3回BESETO 哲学会議（東京大学駒場キャンパス）

一ノ瀬正樹 6

《医療・介護従事者のための死生学》基礎コース — 冬季セミナー —

清水 哲郎 7

若手研究者による国際医療倫理ワークショップ

島藺 進 8

臨床死生学・倫理学研究会 平成20年度報告

山崎 浩司 10

●若手研究者の活動●

エッセイ 死生学と東アジア

土屋 太祐 12

報告 平成20年度アカデミック・ライティング集中講座

野村 智清 13

報告 死生学研究会

山本栄美子 14

●企画案内●

死生学ワークショップ「戦争と戦没者をめぐる死生学」予告

一ノ瀬正樹 15



死生学 DALS ニュースレター No.22

平成21年3月26日発行

東京大学大学院 人文社会系研究科

グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」

代表者 島藺 進

〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番1号

Tel&Fax 03-5841-3736

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku/>